

# 海辺の風景

合庭 惇

四方を海に囲まれ、列島を貫く急峻な山岳からは河川が海に向かって駆け下る日本の景観は水とともにある。この列島を代表する景勝地として天橋立・松島・巖島が「日本三景」として並び称されているが、いずれも海辺の風景である。また、中国湖南省洞庭湖の瀟水と湘水付近の佳景を八つ数えた「瀟湘八景」にならう「近江八景」「金沢八景」も水とともにある。

この景観が広く海外に知られるようになったのは、いつ頃からだろうか。「金沢八景」は明の心越禅師が元禄年間に命名したと伝えられるので、日本を旅した異国からの人々が日本の海辺・水辺の風景を古くから愛でていたであろうことは想像に難くない。

写真術の登場とともに多くの景観が光学的に記録されるようになるが、鎖国状態にあった江戸期の日本に開国を迫った米国海軍のペリー提督も、その艦隊に画家のウィリアム・ハイネと、画家で写真家でもあつ

たエリファレット・ブラウンを乗り込ませ、寄港したアジアの各地でさまざまな対象を描かせると同時に写真にも撮らせた。ブラウンは2年間の航海中に400枚以上の銀板写真(ダゲレオタイプ)を撮影したと伝えられているが、ペリーの『日本遠征記』にはこの写真にもとづいて作成されたリトグラフが20枚近く掲載されている。

当時はまだ写真印刷という技術が実現されていなかったため、出版物に写真を掲載するためには、いったん銅板や木版に模写したものを金属活字とともに版面に組みこんで印刷していたのである。写真印刷という手法が完成すると、フィルムから鉛版や銅板に転写したものが使われるようになるが、それはまだまだ後のことである。

『日本遠征記』に残された図版が、おそらくは写真による最初の記録行為だと考えられるのであるが、残念ながら原板の大半は焼失してしまったので今では見ることができない。また記録されている対象も人物や仏閣などで、私たちが絵はがきで親しんでいる風景写真とはほど遠い。

ペリー以後も来日した外国人、さらには写真技術を習得した日本人が撮影に取り組んで多くの写真を残している。数年前に英国のケンブリッジ大学図書館に死蔵されていた200点余りの古写真が発見されて話題になったが、これも1882年に来日した英国人旅行家ヘンリー・ギルマーがマーケーザ号というヨットで日本列島を周航した際に、同行した日本人の写真家に撮影させたもので歴史的にも極めて価値の高いものである。また、いわゆる絵はがきの構図で撮られたものも残されている。

ところで、私たちは旅行の折々に風景写真などが印刷された絵はがきを旅の思い出として購入することがある。気に入った絵はがきがあれば同じものを何枚か手に入れて、短い便りをだすときに使うこともある。これが絵はがきというものの通常の使われ方だと思うのだが、場合によっては思いがけない使われ方をすることがあって驚かされる。

ワシントンにある米国議会図書館のプリンツ・アンド・フォトグラフィクス・ディヴィジョン（版画・写真部）で、同館が所蔵している日本の浮世絵コレクションのデジタル化とデータベース構築の作業をしている折、このディヴィジョンには未整理でカタログ化されていない日本の絵はがきが大量にあるという話を聞いたことがある。その一部を垣間見ることのできたのだが、担当のライブラリアンによれば太平洋戦争に際して急ぎ収集されたもので、その目的は日本本土上陸作戦のための海岸線調査にあったようだ。

黒船に乗ってやってきたペリーも、浦賀に到着するなり江戸湾の測量に着手して海図の作成に取りかかったというのは有名な話である。この江戸湾を三角測量してみると、はるばる持参してきたシーボルト『日本』に記されている伊能図の江戸湾と形状がまったく同じだということが分かり伊能忠敬に脱帽したそうである。ペリーの場合は最初から明らかに軍事目的であったが、民間で作成された絵はがきを軍事の場面に利用するという発想には虚を突かれた思いがしたものである。

しかし考えてみると、このような例には枚挙の暇がないようにも思わ

れる。よく知られた例では、ドイツの出版社であるカール・ベデカーが19世紀後半から出版している旅行ガイドブック、いわゆる「ベデカー」がある。第二次大戦中の1942年3月、英国空軍はドイツのハンザ都市の一つであるリューベックに猛烈な空襲を行って、リューベックを壊滅に追い込む。ナチス・ドイツは4月と6月に英国に対して復讐の空爆を試みるが、その際の爆撃目標の設定にベデカーの英国案内が使われたため、この空襲は「ベデカー襲撃」(Baedeker Raid)と呼ばれるようになった。

このベデカーは第二次大戦後の冷戦期にも大活躍をする。冷戦期にはヨーロッパは「鉄のカーテン」によって東西に分断された状態に陥り、西側には鉄のカーテンの向こう側の状況を把握する手段が限られてくる。そのような時に、第二次大戦直前に出版されたベデカーが貴重な資料として利用されたために、西側の古書店では高値で取引されたという。実際、洋書を扱う日本の古書店でもベデカーの戦前版が高値を付けていた時期があった。

穏やかであるべき海辺の風景から話がきな臭い方向へ脱線してしまったが、私たちが日常的に愛好している庶民的な絵はがきにも思いがけない使われ方があるということに気づかされたのが、米国議会図書館での経験であった。そしてこの経験は、海辺の風景に限ることなくすべての事物にあてはまるであろうことにも思いは至るのである。